1．地域の中の東山古墳群

岡﨑　壮太・本田　龍平・依田　萌奈

1．はじめに

兵庫県多可郡多可町は風土記の記述に因んだ町名にも表れているように[1] 長い歴史を有する地域である。現在でも町内各所に遺跡や寺社等をみることができるが、東山古墳群ほどその歴史を体現した文化財は存在しないだろう。同古墳群は横穴式石室を埋葬施設とする大小 16 基の円墳群からなり、築造年代については 7 世紀初頭から 7 世紀後葉にあたると推定されている（菱田 1999）。横穴式石室の多くは開口して、攪乱を受けていたが、1994 年から京都府立大学考古学研究室によっておこなわれた発掘調査の際にも多くの遺物が出土し、その中には古墳時代以降の再利用を示すものもみられた。これらの遺物はすべて古墳群の東に隣接する多可町立那珂ふれあい館に収蔵され、一部は常設展示されている。今回の調査では、東山古墳群や那珂ふれあい館を実際に見学するとともに両者を中心とした文化財活用の現状と課題について聞き取りをおこなった。

古墳時代に地域の権力者の奥津城として築造された東山古墳群であるが、中世、近世と時代が移り変わるにつれて、その利用方法や、人々からの捉えられ方も変化してきたようである。現在では未来に保護するべき文化財であり、多可町観光の目玉の一つとしても捉えられているこの古墳群は、どのように地域と関わってきたのだろうか。東山古墳群の現在の在り方を確認し、未来の世代への継承のあり方を模索するべく今回の調査に臨んだ。

2．那珂ふれあい館における調査の過程

2022 年 8 月 11 日、那珂ふれあい館を訪れ多可町の文化財活用の現状を確認するための調査をおこなった。本節では各調査の概要について述べていく。当日の調査は以下の 4 つである。

（1）東山古墳群の模擬ガイド

那珂ふれあい館を拠点に活動するボランティアガイドを対象とする聞き取り調査に先立って、他の学生を対象に東山古墳群の模擬ガイドに挑戦した。ガイドを実際に体験することで、古墳群のどの箇所を紹介すればよいのか、実物の文化遺産を前にしてどのような体験を見学者に提供することが可能なのか、情報を的確に伝えるためにはどのような話法を用いることが効果的なのか等、ガイドの方々の経験に即した具体的な疑問点を洗い出すことが可能になると判断したためである。約 20 分の時間を取り、『東山古墳群Ⅰ』をもとに解説をおこなった。後述の学生アンケートの結果にも如実にあらわれているように、古墳公園の広さや目的の墳丘への移動時間など実際にガイドするにあたって考慮すべき課題が浮き彫りになったように思われる。

（2）多可町の文化財関係者への聞き取り調査

模擬ガイドの後、那珂ふれあい館内にて多可町の文化財関係者への聞き取り調査を実施した。調査の詳細については後述する。

（3）ワークショップとその内容の共有

聞き取り調査の後、学生を中心にワークショップをおこなった。前述の聞き取り調査の内容を踏まえて、「那珂ふれあい館の展示やボランティアガイドによって、多可地域の歴史をより多くの人々に理解してもらうには今後どのような活動をすれば良いと思うか」というテーマで議論し、班ごとに内容をまとめて全体での共有を図った。各班で出された意見では、古墳群と隣接する多可高校の生徒と共に地域学習をおこなうことを通じて、若者と多可町文化財の関係を強めることが重要であると指摘するものが多くみられた。ワークショップを通じて文化財活用に関する学生の意見を多可町に還元するとともに、現地の人々がどのように学生の視点を受け止めたのかを確認することもできた。

（4）学生を対象にしたアンケート実施

上記の調査の後、今回の調査内容や那珂ふれあい館の展示についてどう感じたか等、今回フィールド実習に参加した学生から直接意見を集めることを目的としてアンケート調査をおこなった。質問項目やアンケート結果の詳細については後述する。（岡﨑壮太）

3．聞き取り調査とワークショップの概要

多可町唯一の文化財専門職員である安平勝利氏と多可ふれあいボランティアガイドの竹内宏企氏、宮崎和明氏を対象に聞き取り調査を実施した（写真１）。また、当日開催されていた体験プログラムの担当職員と、参加していた保護者にも 10 分程度のインタビューをおこなった。

日時：2022 年 8 月 11 日
　　10：00 ～ 11：00　聞き取り
　　11：00 ～ 12：00　ワークショップ（写真２）
場所：那珂ふれあい館
インフォーマント：竹内宏企氏、宮崎和明氏、安平勝利氏
調査者：石川達葵、岡﨑壮太、小原万侑、小島慧音、島村朱音、橋本唯、廣野勝、
　　藤田尚希、本田龍平、山下悠衣奏、依田萌奈、長谷川巴南、守田悠

（1）調査結果

以下、調査で明らかになった那珂ふれあい館の現状について項目ごとに整理する。

施設の概要　　那珂ふれあい館は、2004 年（平成 16）に旧中町の施設として開館し、2005 年に合併した後は、多可町の文化財を扱う施設の中核として機能するようになった。発掘調査後におこなわれた東山古墳群の整備や那珂ふれあい館における展示室の設置

写真１　聞き取り調査の様子 (日井上直樹撮影)

はより多くの多可町民が東山古墳群を認識するきっかけとなった。来館者の傾向としては近隣の市町、特に加東市から来館する人が多い一方、多可町内からの来館は加東市に比べると少ない傾向にある。また、多可町内のほとんどの小学校では、校外学習の一環として那珂ふれあい館を訪れることが定着している。

写真２　ワークショップの様子

運営体制　　正規職員２名、臨時職員４名、西脇・多可シルバー人材センターから派遣された職員１名がいる。那珂ふれあい館に隣接する東山古墳群の草刈りは、今まで東山地区の住民によっておこなわれてきたが、住民の高齢化に伴い円滑な実施が困難な状況になりつつある。

多可ふれあいボランティアガイド　　多可町には那珂ふれあい館を事務局として、多可ふれあいボランティアガイドが組織されている。2005 年に多可町として合併した後、旧中町・加美町における有志のボランティア団体が那珂ふれあい館のボランティアガイド事務局に統一され、現在の多可ふれあいボランティアガイドに至る。主な活動である東山古墳群のガイドは 2007 年にスタートし、毎月第二日曜日に実施している。

現在約 20 名が在籍する多可ふれあいボランティアガイドであるが、近年その人数は減少傾向にある。その理由に高齢化が挙げられ、平均年齢は 60 ～ 80 代で、70 代が最も多い現状である。多可ふれあいボランティアガイドとして活動している会員は全員多可町在住で、複数の団体と掛け持ちをしている人が多く見受けられる。

体験プログラム　　那珂ふれあい館では、毎週土日に体験プログラムを開催しており、午前と午後でその内容が異なる。内容は多岐にわたるが、多可町が発祥の地である杉原紙、山田錦、敬老の日に関わるものを基本とする。子どもでは年長～小学校４年生まで、大人は 50 ～ 70 代が参加者の主たる年齢層である。現在、新型コロナウイルスの影響で定員は今までの半分に設定されているものの、毎回定員いっぱいまで予約が埋まり、リピーターの参加率も高い。口コミや SNS を通じて参加する人も多い。那珂ふれあい館は広報にも力を入れており、３か月単位で体験プログラムの内容や日程を記載したチラシを体験プログラム担当職員が中心となって作成している。チラシは多可町、加東市、丹波市の小学校に配布されている（図１）。

体験プログラム担当職員への聞き取りからは、新規参加者よりリピーター層が厚く、特に加東市からの参加が多いということが分かった。参加した保護者は、学校で配布されるチラシを見て来館することが多いと言い、毎週イベントがおこなわれることに対して好意的な意見が聞かれた。

古墳祭り　　東山古墳群では、2002 ～ 2015 年まで毎年 11 月に古墳祭りがおこなわれていたが、現在は住民の高齢化や減少に伴い実施されていない。2014 ～ 2015 年までは那珂ふれあい館祭りも毎年５月に実施されていたが、同様の内容のイベントが各所で開かれたため中断された。古墳祭りは東山地区の人々によって自発的に始まったイベントで、内容としては、火起こし、勾玉作り、野菜市、屋台、ステージでの催しなどがあり、ステージ演奏や受付のボラ

図１－１　体験プログラム予定表（表）

図１－２　体験プログラム予定表（裏）

ンティアには多可高校の生徒が参加していた。

（２）現状分析

東山古墳群の草刈りが人手不足のため困難になりつつある現状や、古墳祭りが実施されなくなったこと、ボランティアガイドの高齢化を踏まえると、やはり多可町における少子高齢化及び人口減少が文化遺産の保護・活用にも少なからず影響を与えていると言える。

一方で、ボランティアガイドによる東山古墳群の解説を継続的におこない、毎週体験プログラムを実施しリピーターが多く訪れるなど、那珂ふれあい館は研究施設の側面を持つと同時に、研究成果を町民に還元する、多可町及び周辺地域の歴史教育の拠点としての地位を確立していることが聞き取りから明らかになった。（依田萌奈）

４．東山古墳群・那珂ふれあい館見学アンケートの分析

本節では、東山古墳群と那珂ふれあい館の見学後、京都府立大学文学部歴史学科２回生 11 人を対象におこなったアンケートの分析結果を報告する。以下ではアンケートの回答をもとに、４つのテーマ別に東山古墳群や那珂ふれあい館の展示に関する課題などを分析していく。アンケート回答者が歴史学専攻の学生であり、一般の客層に比べて歴史に興味のある人が多いことに留意する必要があることはいうまでもない。

（１）東山古墳群の見学（写真３）

アンケートでは「東山古墳群の復原公園に満足しましたか」という質問を５段階評価でおこなった。アンケートの結果は４と評価した人が６人、３と評価した人が４人、２と評価した人が１人であった。見学者は概ね満足しているといえる。

また、自由記述欄では「石室内を間近に見られてよかった」というものがある一方で、「石室見学を躊躇する」という意見もみられることから、石室内へアクセスしやすい環境づくりが東山古墳群の魅力向上の一助になると思われる。「ヒルが多く怖い」という感想もあり、「石室内をきれいに掃除する」ことや、「石室内に入れることをアピールする」ことが改善案としてあげられた。また草の繁茂の問題に関しては、より高頻度の草刈りを求める声があがった。草刈りに関しては主要な古墳の石室入り口の導線だけでも確保する必要があると思われるが、人員不足といった課題がある。

また現在の石室外にある解説板がよかったという声もあったが、石室内部にも「解説パネルを設置する」こと、石室外に「現在のパネルよりも易しい内容のパネルを設置する」ことが提案された。またボランティアガイドの「解説は頼まないとしてもらえない」というのが障壁になっているのではという声が複数あったが、これに対して「QR コード」を使って音声解説をつければよいのではとの提案が寄せられた。石室と同様に解説へのアクセスのしやすさが、魅力向上のために必要な措置であると思われる。

東山古墳群見学の感想については、古墳の周辺環境への指摘はありつつも、「貴重な見学となった」「貴重な経験ができる」との好意的な感想が目立った。歴史を専攻する学生にとっても古墳の石室に入るという経験は滅多にできるものではなく、環境さえ整えれば、石室見学は東山古墳群の大きな魅力になる可能性を秘めているといえよう。

（2）ボランティアガイド・安平氏への聞き取り調査

アンケートではボランティアガイドのお二人と安平氏の話を聞いて気づいたこと・感じたことを自由記述で募った。「地元の歴史をよく知る人たちの存在は大きいと感じた」という感想が寄せられたように、那珂ふれあい館は、郷土史をよく知るボランティアガイドの方々によって支えられている郷土史を知るための重要な拠点である。しかしアンケートの結果を見ると高齢化や館への「学術的な正しさ」を求める声によって、ボランティアガイドの活動は縮小傾向にあるといえ、このままでは、郷土史の記憶が人知れず消えてしまう可能性も大いにある。郷土史学習の拠点を守るためにも、語り部の世代交代や、語り部のマニュアル作成など学術面でのサポート体制の構築は喫緊の課題だろう。

（3）那珂ふれあい館の展示（写真４）

アンケートでは「展示には満足しましたか」という質問を５段階評価で行った。アンケートの結果は４と評価した人が７人、３と評価した人が４人、２と評価した人が１人であった。見学者は概ね満足しているといえる。またアンケートでは、那珂ふれあい館の展示を見学して気づいたこと・考えたこと、また那珂ふれあい館の展示は「どうすれば満足できると思うか」という質問を自由記述欄で設けた。

回答では、「スペースは小さいが充実した展示」「少ない展示スペースであれだけの展示品を効率よく展示していてすごく濃密な時間を過ごせた」という評価や、ワークショップで「作った作品を展示するスペースがあるのはいいと思った」など、那珂ふれあい館の展示スペースの使い方に関しては高評価が目立った。

モノと子どもたちの距離感の問題への言及も目立った。昭和の民具が子どもたちの目を惹きやすいと好印象に捉えられている一方、壺や土器などの遺物の露出展示については「子供た

ちが走ったり手に取ったりして破損する可能性が高い」という意見があった。またワークショップが、子どもたちが「地元の文化を勉強するのにとても役立っている」と高く評価する声もあったのに対し、展示は子どもたちには解説が難しく「図書館のポップ」のような簡単な解説があれば望ましいという意見が出た。

古墳・遺物に関する展示では、東山古墳群の遺物は「古墳ごとに」「古墳の分布図」とともに展示すると分かりやすいという指摘があり、後述の地図情報の改善案とも共通している。また「古墳の再利用」の歴史に関する展示が欲しいという声もあがった。墳墓としての役目を終えた東山古墳群がどのようにして現代に至ったかという展示をおこなえば、より地元の人々の興味を惹くことができるのではないかと思う。

一方、「遺跡の位置が分かりにくかった」、「遺跡の地理的位置の解説が欲しかった」という意見があった。しかし展示室内には既に地図が設置されていたため、既設の地図が見にくかったことで生まれた提案であると考えられる。展示ブースごとに地図を置くなど、地図をより強調した展示が求められる。また「東山古墳群の地層のはぎ取りがあるのに収蔵庫に眠っているのはもったいない」、「東山10号墳のトレンチの剥ぎ取りがインパクト大なのに、展示ではなく収蔵庫に保管されていたことが残念だった」という声があった。限りある展示スペースではあるが、来館者の心を掴む資料として展示されるのが望ましいだろう（写真5）。

写真3　石室内を見学する学生（長谷川巴南撮影）

写真4　那珂ふれあい館の展示を見学する学生（長谷川巴南撮影）

以上からわかるように、那珂ふれあい館では限られたスペースの中で歴史学専攻の学生たちにとって非常に満足度の高い展示がな

写真5　はぎ取り（写真左端）と見学する学生（長谷川巴南撮影）

されているが、地図や剥ぎ取りなど、大きく目を惹く展示や解説によって、よりわかりやすく面白い空間が生まれると思われる。また「古墳の再利用」に関する展示によってより多角的な視点で展示ができるのではないだろうか。

（4）東山古墳群と地域との関係

アンケートでは「東山古墳群と地域との関係について理解が深まったか」、「東山古墳群が地域と辿ってきた歴史を理解できたか」という質問を５段階評価で行った。「地域との関係との理解」に関するアンケートの結果は５と評価した人が４人、４と評価した人が３人、３と評価した人が３人であった。一方、「東山古墳墳が地域と辿ってきた歴史への理解」に関するアンケートでは、５と評価した人が４人、４と評価した人が２人、３と評価した人が４人、２と評価した人が１人で、人によって理解に差が生じていることがわかる。

またアンケートでは、「那珂ふれあい館の展示やボランティアガイドなどの活動等によって、東山古墳群と地域の関係をより多くの人たちに知ってもらうには、今後どのような活動をしたら良いと思うか」という問いで自由記述欄を設けた。回答では、多可高校の生徒がふれあい館や古墳を紹介するボランティアガイドのような役目を担ったり、草刈りを手伝ったりするなどの協力事業に関する提案が多く挙げられた。また多可町を巡るスタンプラリーや遺跡の周遊コースの策定などがあがった。Web や SNS 活用の提案も多かった。若年層へのアピールとして SNS は有効であるが、SNS 担当者の設置に対しては懸念の声もあった。他にも話題づくりのための提案として、古墳をモチーフにしたプリンやケーキを提供するレストランとの提携や、古墳群でのバンドの演奏などがあげられた。

以上のように、学生目線による提案では、学生がよく使うツールである SNS の活用に関する提案が特に多かった。また近隣に古墳が立地するという多可高校を羨ましいという感想もあった。多可高校の学生たちが SNS で発信してくれるような環境づくりができれば、那珂ふれあい館や東山古墳群の発信力は大いにあがるのではないかと思う。（本田龍平）

５．おわりに

今回の調査では、那珂ふれあい館を拠点としたボランティアガイドの現状を確認したほか、多可町周辺の人々がどのように古墳群を捉え、関わってきたのかを知ることができた。また、聞き取り調査を踏まえたワークショップを通じて、町外に住む大学生が多可町の文化財にどのような価値を見出し、どのような方法があると考えたか、その意見のいくらかは町に還元することができたかのではないかと思う。長年にわたり地域に根付き、過去の人々の痕跡をダイレクトに現代に伝える、そのような文化財が多可町には溢れていた。その姿をより多くの人々に知ってもらえるよう、私たちの拙い意見が僅かながらも役に立てば喜ばしい限りである。最後に、聞き取り調査を始め数々の活動に協力してくださった安平勝利氏、竹内宏企氏、宮崎和明氏に心から感謝申し上げます。（岡﨑）

註

1）播磨国風土記「託賀郡。右、所以名託賀者、昔、在大人、常勾行也。自南海到北海、自東巡行之時、到来此土云、「他土卑者、常勾伏而行之、此土高者、申而行之。高哉。」故曰託賀郡。其踰迹処、数々成沼。」（稲

垣 1997）

参考文献

植垣節也校注・訳 1997『風土記』（新編日本古典文学全集５）小学館

菱田哲郎 1999「２　古墳群の分布と構成」『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。（う）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第９号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発　行　日　2023 年 3 月 30 日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2